山形市の自然環境の概要

＜概要＞

山形市は山形県内陸部山形盆地の東南部に位置し、市域の約６５％が山岳丘陵地帯からなり、地形的には、奥羽山脈、山形盆地、西部丘陵地に大きく分けることができます。

山形市域の奥羽山脈は大半が蔵王国定公園に指定されており、高山帯、亜高山帯、山地帯を形成し、変化に富んだ豊かな自然環境を示しています。

白鷹丘陵には白鷹火山のカルデラにみられる西部湖沼群が形成されており、その特質的な地形がゆえに、貴重な動植物の宝庫となっています。

＜自然環境調査の経過＞

昭和４９・５０年の２ヶ年にわたり、山形市の動植物の生息状況について調査をおこない、昭和５１年に「山形市の生物的自然」として報告書がまとめられています。また昭和５４年から平成３年にかけて、馬見ヶ崎川上流・立谷川上流・高瀬川上流・山形西部の４地域について、山形市の自然環境の調査をおこないました。

その後の自然環境の変化の状況を把握するため、平成１３年から平成１８年にかけて、山形市周辺を里山中心に６地域に分け､各年に１地域毎に自然環境の調査を実施しました。

＜自然環境の現況＞

１　植生

⑴　蔵王山・雁戸山地域

①　山地帯の植物

〇蔵王山

標高 1,400m付近までは、スギ・カラマツの植林やミズナラ・ブナなどの二次林で覆われている。自然植生は千歳山のアカマツ林や瀧山の中腹以上、熊野岳の北面、名号峰から八方沢・葉ノ木沢・不動沢の源流部にかけて、わずかに残存しているにすぎない。原則的には標高 500m付近でクリ帯からブナ帯に移行し、標高 1,000m前後では、林床にチシマザサを伴うブナの純林となる。地形的に平坦地や緩斜面のブナ林の林床にはヒメアオキが、尾根筋や急斜面ではマルバマンサクの多いブナ林が発達している。

〇瀧山の西山麓

本地域はオオヤマザクラが多く見られるところで、林床にはキンセイラン・クマガエソウ・エイザンスミレなどの貴重な植物が分布していたが、現在ではほとんど確認できない。千歳山・盃山・愛宕山・岩波・西蔵王の一帯は、本来太平洋の関東ムツ地区を生育の本拠地とするザイフリボク・ミヤマウグイスカグラ・フジウツギなどが分布し、大平沼などの湿地にはミズバショウ・ザゼンソウ・ヒメザゼンソウの群落が残存している。

〇アベマキ林

盃山・愛宕山・滑川などの山麓帯では、平地に接する西から南向きの温暖な斜面に限って、北限の分布地であり暖地系のアベマキ林が発達している。

② 亜高山帯の植物

○蔵王山

亜高山帯の標高 1,350m～1,650m付近は、アオモリトドマツ（オオシラビソ）を中心とする亜高山性の針葉樹林が広く発達しているが、三宝荒神山の北面の急崖などの地形的に不安定な立地にはダケカンバ林が発達している。蔵王山のアオモリトドマツ林は、その構成や構造が多様で学術的に貴重な標本地域とされている。

○雁戸山

標高 1,498mの雁戸山は、標高的には亜高山帯に属するが、山頂近くにはサラドウタン・ミネヤナギ・リョウブなどの風衝や低温による山頂現象と見られる落葉低木群落が発達している。また、標高の高い稜線沿いにはハクサンシャクナゲ・ナナカマド・ミネカエデ・ミヤマナラなどから構成される亜高山性の落葉低木群落が発達しており、更に急斜面の山頂付近では小範囲ながらハイマツの低木林が見られる。

○湿原

地蔵山周辺の標高 1,450m付近には溶岩台地が発達しており、小規模ながら山地貧栄養性の湿原が点在している。

③ 高山帯の植物

○ハイマツ低木林

標高 1,650mからは高山帯で、三宝荒神山山頂付近や地蔵山～熊野岳一帯にはハイマツ低木林が発達しており、ミネザクラ・アカミノイヌツゲ・キャラボクなどが混在している。その林床には、コケモモ・ハクサンチドリなどが見られる。

○火山荒原の植物・高山矮低木群落

熊野岳の山頂付近は、火山岩塊・砂礫に覆われた火山荒原が発達しており、植物が侵入していない砂礫地に限って、蔵王のシンボルともいうべきコマクサが見られる。この火山荒原に最初に侵入するのは、コメススキやメイゲツソウで、次いでガンコウラン・ミネズオウなどの高山矮低木林である。更にミネヤナギ・ミヤマハンノキなどの低木が定着し、やがてハイマツが侵入して安定した植生となる。

⑵ 奥山寺・面白山地域

本地域は、最高峰の山形神室（標高 1,344m）をはじめ、ハマグリ山、瀬ノ原山、小東岳、面白山などがあり、奥羽脊梁山脈に連なる山稜である。標高的には山地帯に含まれるが、その山岳を貫流する遊仙峡・カブト沢などには深い渓谷や大小さまざまな滝が存在する。また、浸食や構造線の崩壊によって造られた奇岩奇峰がいたるところに点在し、地形的・地質的にも極めて複雑な地域である。

自然植生は山地帯上部のかなり広い範囲に残されている。ブナ林は二口峠を中心に小東岳～ハマグリ山にかけて残存しており、風衝の強い稜線部にはチシマザサ群落や亜高山性の落葉低木群落が発達している。また、標高 700m以下にはコナラを主とする二次林が存在する。

立石寺を中心とする山寺周辺は、スギがかなり多く混在し自然に近いアカマツ林からなり、これらのスギ・アカマツ林が奇岩・岩峰に林立し、寺社の建造物とあいまった景観は、自然と歴史が一体となった典型的な歴史的景観をかもし出している。標高 300m～600m地帯はクリ・コナラの二次林に覆われているが、沢筋にはスギ、南西斜面にはアカマツ・カラマツなどの針葉樹が植林されている。標高 600mの上

部にはミズナラ・ブナ林が発達し、冬の衝風地にあたる奥羽山地では低木化したブナ林が見られる。

また、分布上注目すべき植物群として、雁戸山に連なるハマグリ山・山形神室・小東岳・面白山の連山は奥羽分水界であり脊梁山脈であるが、その山脈を境にして、ゴヨウツヅジ・トウゴクミツバツツジ・ベニバナニシキウツギなど、本来は太平洋側を生息地とする関東ムツ区系要素が多数越境分布している。特に遊仙峡は、カツラ・サワグルミ・トチノキ・ミズナラなどの渓谷林の他に、ハコネシダ・ニオイシダ・コガネシダなどは県内唯一の産地であり、日本列島における北限の分布地である。

⑶　白鷹山地域

本地域はほとんどが代償植生域で占められている。山地・丘陵地帯は広葉樹二次林のコナラ群落で、白鷹山山頂付近にはミズナラ二次林と多少のブナの存在が認められる。また、山頂には社叢として植栽されたスギの巨樹がある。苔沼・大平付近の二次林の林床には、ムシカリ・リョウブ・オオバクロモジなどが伴うユキツバキが見られる。ユキツバキ群落は東北～北陸にかけての日本海側の豪雪地帯に分布するもので、県内では置賜・最上地方、月山山地などに広い分布があり、白鷹山地はその最も東側に位置する分布地である。自然度の極めて低い本地域であるが、白鷹山北東山麓に点在する湖沼群には、動植物の分類学上極めて貴重な種類が多く点在する。

２　野生生物

⑴　哺乳類

市域において生息が確認されているのは約２８種である。哺乳類の多くは夜行性であり、日中は物陰で休み、夜遅くなってから活動する。特別天然記念物として種の指定になっているニホンカモシカは、ウシ科の動物で最も原始的な姿をとどめているといわれている。奥羽山系のいたるところに生息し、その数は増加傾向にあり、近年は白鷹山地においても生息が確認されている。ニホンツキノワグマは、低山帯から亜高山帯まで広く分布し、ナラやブナ・クリなどの木の実を食する。ホンドザルは、面白山山系・瀧山等に数頭の群れを作り生息している。近年生息域を広げ、人家近くまで出没し農作物等に被害を及ぼす例も報告されている。その他、全山いたるところに分布するトウホクノウサギ・ホンドテン・ホンドタヌキ・ホンドキツネ・ニホンアナグマ等が多数生息している。

⑵　鳥類

市域において見ることのできる野鳥は約１５０種類であるが、一年中その地域に生息する留鳥、春に渡来して繁殖し秋に渡去する夏鳥、秋に渡来し寒さをしのぎ春と共に渡去する冬鳥、季節によって地域を移動する漂鳥、渡る途中少しの間立ち寄る旅鳥、ごくまれに見ることのできる迷鳥などに分けることができる。東に位置する蔵王連峰などの奥羽山系には、高山の鳥として岩場に生息するイワヒバリ・ビンズイ・カヤクグリなどが生息し、岩場にはイワツバメが営巣繁殖している。アオモリトドマツ・ハイマツの自然植生の群落にはホシガラスが群生し、ブナ帯などの広葉樹林には、日本三鳴鳥のひとつであるコマドリも多く生息している。山寺周辺の

アカマツ林の自然植生にはヒガラ・シジュウカラ・ヤマガラが生息、奥山寺の渓谷と落葉広葉樹林にはキビタキ・オオルリ・アカショウビン・ヤマセミ等が見られる。白鷹丘陵は東に比べ標高も低く狭隘であり、山地の鳥・村落の鳥・水辺の鳥が重なり合い生息している。湖沼付近にはオオタカの生息も確認され、更に秋に大群で飛来するマヒワ・カシラダカ・ツグミなど多くの冬鳥の小鳥が冬を越している。市街地を含む里にはチョウゲンボウやアオバズクが少しずつ増えており、カワラヒワ・ヒヨドリなどは庭先でも見られ街路樹にも営巣している。市の中央に位置する霞城公園にはキジバト・モズク・ヒガラ・シジュウカラが見られる。また、愛宕山周辺は鳥が豊富であり、キセキレイ・オオルリ・メジロ・ウグイス等が見られる。更にその下を流れる馬見ヶ崎川畔では、漂鳥の逗留地、冬鳥の渡来地となり、アトリ・カシラダカ・エゾヒダキ等が見られる。

⑶　魚類

本市の水系である須川の源が蔵王温泉になっているため、酸性度が強く最上川から遡上できる魚類が限られその種類は比較的少なく、生息が確認されているのは約３０種である。現在では絶滅したと思われるのは、タナゴ類とイバラトミヨである。タナゴ類は、タナゴ・ヤリタナゴ・ゼニタナゴの３種が生息していたといわれるが現在は見ることができず、変わって各地の湖沼で増えているのが、タイリクバラタナゴである。北方系冷水魚で北海道から本州北部に分布しているイバラトミヨは、相次ぐ開発により残存生息数が激減し、本市において最後まで残っていたのが滝平地区の田尻沼であったが、現在では見ることができない。

⑷　両生類・爬虫類

両生類で生息が確認されているのはイモリ・サンショウウオ・カエルなど１７種である。イモリは市街地近くでは数が減少しているが、山間の水田や池沼では普通に見られる。東北地方と新潟県だけに生息しているトウホクサンショウウオは千歳山麓・山家で、クロサンショウウオは蔵王・滝山で、ハコネサンショウウオは妙見寺・宝沢などで見ることができる。また、カエルではヒキガエル・トノサマガエル・ニホンアカガエル・カジカガエルが、水田の乾田化や農薬の影響・河川工事の影響による環境の変化に伴い、生息数が激減している。比較的影響を受けないアマガエルは、よく新興住宅地に繁殖している。

⑸　昆虫類

昆虫類は約５，０００種が確認されている。本地域のうち、盃山及びその付近や二口峠は諸昆虫が多く、分布研究上注目すべき稀種が確認されている。特に盃山は、コナラ・アベマキを主とする落葉広葉樹林が発達していることから、クロミドリシジミをはじめヒメギフチョウなどを産し、県内でも最も貴重な地域である。トンボ類はもっともなじみ深い昆虫であり、西蔵王や白鷹山地の湖沼にはヤンマ類・イトトンボ類・サナエ類など多くの昆虫が生息し、湖沼による生息種類の違いなども見られ、大変貴重な場所となっている。

注）山名については山形市管内図から引用している。